

アクティブ・ラーニングプログラムとして実践する地域貢献演習の展開

Deployment of regional contribution exercises to practice as an active learning program

川田 博美
Hiromi KAWADA*1

名古屋女子大学短期大学部
College of Nagoya Women's University

あらまし：生活系短大生を対象とした「協働型サービスラーニング」の手法の導入による「社会人基礎力」育成のためのプログラムの展開実験を進めてきた。「協働型サービスラーニング」の多くが、「学内での学び」を基にして、学生の「自発性」と「ボランティア精神」による「学外での学び」を保証する取り組みであるが、本学科のプログラムの特徴は、学外での活動における協働型サービスラーニングの実践ではなく、それを学内で実施するイベントにより実践している点であった。それをこれまで選択履修による1専攻単位で実施してきたが、2013年度より、学科単位で必修履修とすることになったことを受けて、このプログラムにこれまでの倍以上の学生を収容する必要が出てきた。そのため、1つのイベントでは収容しきれず、複数のテーマに分散させることを目的として、「社会人基礎力」の項目により決めた「選択パターン」を設定したうえで、運用を開始した。さらに、2014年度からは、学びの場としての『街なか・サテライト（アクティブ・キャンパス）』を学外などに求め、本学科各コース専修者としてふさわしい専門性の保証と学生個人の能力アップを目指した『生活学科アクティブ・ラーニング・プロジェクト』を展開し始めた。その概要と方向性を報告する。

キーワード：短大教育、協働型サービスラーニング、社会人基礎力育成、アクティブラーニング

1. はじめに

文部科学省が説明する「アクティブラーニング」とは、教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称である。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブラーニングの方法である⁽¹⁾。

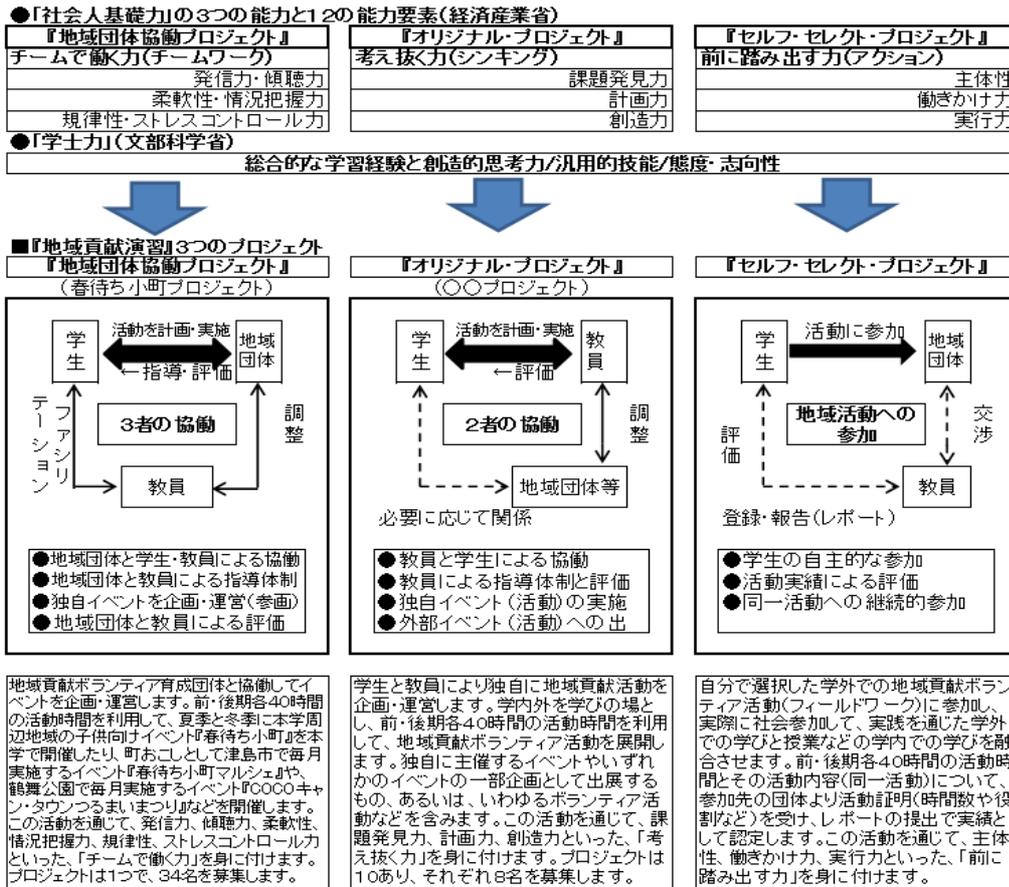
「アクティブラーニング」とは、いわゆる「能動的な学習」のことで、学生の教室内外でのアクティブな学習姿勢のことであり、その実現のために提供される学習環境の提供形態に意義があると考えられる。それは、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等の学習形態の提供をはじめ、特徴的に学内外で提供される学習環境も含むものである。つまり、「アクティブラーニング」の実現には、教授側が「学習者の思考を活性化させるための環境」をいかに提供できるかどうかにかかっているとみえるであろう。

「社会人基礎力」の育成と関連付けた「アクティブラーニング」プログラムとして、これまで、本学科（名古屋女子大学短期大学部生活学科）では、他大学（愛知工科大学自動車短期大学）や地域団体（地域貢献ボランティア協会）との『協働型サービスラーニングの実施』を目標として、教科「バーチャル・カンパニー演習」をカリキュラム内に設置して、地域貢献のためのイベントの運営と実施をその教科の

内容として取り組んできた⁽²⁾。2011年度の入学生に対しては、「協働型サービスラーニング」の強化を図るために、地域貢献ボランティア団体と連携して、セミナーによる「ボランティア」と「社会人基礎力」の育成プログラムと「学外でのボランティア活動実践」プログラムとしての地域貢献ボランティア活動への課外活動との仲介を実験した。この取り組みに参加する学生には、いわゆる「サービスラーニング」の核心の1つともいえる学生本人の自発的な参加が必要である⁽³⁾。2012年度からは、これまで1つのテーマで実施してきたこの取り組みに、複数のテーマを設定することによる、プログラムの選択制を導入した。教育目標を「社会人基礎力」の育成として明確にし、そこに示された「3つの能力」によりテーマを設定し、関連する教員がそれぞれ示した内容により、履修するプログラムを選択するものである⁽⁴⁾。約120名を対象としたその実験を経て、2013年度からは、10名の教員によるテーマを約170名が選択して取り組む1年次必修科目『地域貢献演習』をスタートさせた⁽⁵⁾。

2. 教科『地域貢献演習（入門・基礎・実践・応用）』

教科『地域貢献演習（入門・基礎・実践・応用）』は、短期大学での正課の授業で「社会人基礎力」を育むための実践的な取り組みにリンクした形である。2013年度よりの新カリキュラムで設定したものである。1年次の2セメスタは、必修科目として短期大学部生活学科（生活情報コース、食生活コース、



伸ばすのであれば、他人に対し自分たちの企画や意見を発信する場がなければならない。「働きかけ力」を伸ばすためには、他人の協力を得るために働きかけなければならない機会が必要である。そうした環境が整った上で、学生のやる気、すなわち主体性を引き出すために、「社会の役に立った」という実感が伴うような課題を提供する必要がある。さらに、その課題を解決するために、日頃学んでいる専門知識やスキルが活用されれば、より実践的な学習環境を実感できるであろう。

ファッションデザインコース)の学生が全員履修する。

教科『地域貢献演習』を「協働型サービスラーニング」の場としていく目的と期待されるその効果としては、

- (1) 短大の1、2年生を対象に実施することで、学生一人ひとりが自らにとって将来必要な学習の意味を確認し、地域や社会問題への関心を広げ、グループでの協同学習で基礎的な力をつける。
- (2) 実践的な情報技術教育への導入教育としてモチベーションを高めるとともに、IT環境への理解を深め、より実践力の高い専門職養成を図る。
- (3) 大学と地域団体との連携によるコミュニケーション教育プラットフォームを構築することで、効果的な協働型サービスラーニングのプログラム開発および評価体制を構築する、ことなどがある。

4. おわりに

座学により、社会人基礎力などの能力や能力要素について説明することは容易でも、それを実践する場がなければ、自分の持つ能力を自覚することができない。特にそれらの能力をうまく発揮して、他人を巻き込んだり、自分の意見をはっきり述べたりしながら、自分の能力を発見していく場の提供が必要である。そこで次に必要になるのが、プログラムの提供形態である。学生が「社会人基礎力」を発揮できる場面や環境を提供する必要がある。「発信力」を

参考文献

- (1) 中央教育審議会(2012):『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)』、2012年8月28日、文部科学省
- (2) 川田博美、箕浦恵美子(2011):“協働型サービスラーニングの実現に向けての教育システム構築の可能性”、名古屋女子大学紀要(人文・社会編)第57号
- (3) 川田博美、箕浦恵美子(2012):“「協働型サービスラーニング」をめざす教科の「社会人基礎力」を育成する教育プログラムとしての可能性”、名古屋女子大学紀要(人文・社会編)第58号
- (4) 川田博美(2013):“協働型サービスラーニングにより「社会人基礎力」養成をめざす教科における「選択パターン」の導入”、名古屋女子大学紀要(人文・社会編)第59号
- (5) 川田博美、稲吉由味子、千葉みどり(2014):“「社会人基礎力」の育成を目的とする教科『地域貢献演習』の展開”、日本教育情報学会 第30回年会演説文集
- (6) 川田博美、稲吉由味子、千葉みどり(2014):“短大における街なかキャンパスでのアクティブラーニングの試み”、教育システム情報学会第39回全国大会講演論文集
- (7) 川田博美、稲吉由味子、千葉みどり(2015):“「社会人基礎力」育成のための「協働型サービスラーニング」の実践”、教育システム情報学会第40回全国大会講演論文集